



帰宅困難 南海部 覚悟

「―――何やってんのよ、電車に間に合わなかったら貴方のせいよ！」

早朝6時に叩き起こされ、パジャマ姿のまま、最寄の駅まで車で送らせられた不運な亭主は、喉の根元の少し下の辺りで、助手席の女房に悪態をつきます。

「―――だったらもっと早く起こせよ、さっきまでのんびり顔描いてたんじゃないか。」

「大体、クラス会かなんか知らんが、こんな朝早くから出掛けてどうするんだ……。」

「先週は休日出勤で、2週間ぶっ通しで働いてんだぞ、土曜日くらいゆっくり寝かせろ！」

勿論、喉を越えて言葉には出しません。

ぎりぎりに間に合って、女房は電車中の人になります。

駅の駐車場からそれを見送りながら、パジャマのポケットを弄っていた亭主は、目的の物の感触が無いのに、急に悪い予感がしてきました。

「まさか、部屋のカギ掛けてないだろうなあ……慌てて出てきたから、持ってくるの忘れてた。」

「長男が部屋で寝ているから、まあ最悪大丈夫だが……。」



ピンポン……ピンポン……ピンポン、ピンボン、ピンボン、ピンポン～。

いくら押しても反応はありません、大声を上げてドアを叩きます。

額から汗が滴って、ドアを叩く拳にも、釦を押す指にも、次第に焦りが滲んできました。

「あいつ、試験前で昨夜は遅かったのか。起きてこないかも知れんなあ……。」

その時、隣の部屋のドアが僅かに開いて、眠気眼の髭面が顔を出しました。

「何ですか？朝っぱらから騒々しい……。」

「締め出されちゃったんです―――。すみません、お宅の部屋からバルコニーに出たいんですが、通らせて貰えませんか？」

「―――駄目ですよ、そんなこと！」

「だったらお宅、バルコニーの仕切り板蹴破って、部屋に入ってこのドア開けて貰えませんか？」

「何で私がそんな事しなくちゃいけないんです。管理会社に電話すれば良いじゃないで

すか——。」

「携帯持って出ていないんです、管理会社もこの時間じゃ……。」

其処に、日課の早朝マラソンを終えたマンションのオーナーが、騒ぎを訊きつけてタオル片手に顔を出しました。

「ああ、大家さん丁度良いところに——。マスターキー貸してくれませんか。」

「マスターキーなんて持っていませんよ。どうしたんです、入れないんですか？」

「それなら、私のところに良いものがある。一緒に上がりましょう……。」

最上階の全フロアを占めるオーナーの自宅は、半分が住宅で、残りが広大な屋上庭園になっています。

庭園の奥の、小さなフェンスドアを開けて外に出ると、メンテナンス用のキャットウォークとなって、外側に高めのパラペットが続いて、所々にステンレスの頑丈そうなリングが固定されています。

自宅の物置から持ってきた大きな麻袋を上げると、金具の付いたロープの束が出てきました。

「お宅のバルコニーは確かこの位の位置でしょ。さあ、そのリングにこの金具を通して、体にはこっちのベルトを着けて……。」

工事現場で使う安全帯のようなベルトに、長いロープが2本付いています。

「壁に足を突いて、踏ん張りながらゆっくり降りて行ってくださいよ。——なに、心配することは無い、安全ロックが付いているから一気に落ちることはありません、このレバーで降下速度を調整してください。」

14階の屋上です、パラペットから身を乗り出して下を見た途端、全身に鳥肌立って胃の裏側が凍りつく思いがしました。

「大家さん……大家さんは、これで下に降りたことは？」

「ある訳ないでしょ……万一の備えですよ、あなた。」

「あの……他の方法考えます、大家さん。」

亭主の自宅は東の角部屋で、バルコニーが東側にもあって、避難階段の踊り場から、長男の部屋のバルコニーに面した東のテラス窓が見下ろせます。

昨夜も熱帯夜で、窓は半分開け放たれ、網戸も僅かに透いていて、奥のベッドの端に長男の褐色の脛が見えています。



エントランスの郵便受けから持ってきた、今朝の朝刊をメガホンに丸めて大声で名を呼んでも、一向に気づく様子はありません。

眼下の道路では、もう一週間になる下水道改修工事の大穴が黒々と口を開け、今朝はその直上で電力会社の高所作業車が、柱上トランスの取り換え工事なのか、早朝から作業員と共に電柱に取り付いています。

避難階段を近所の子供が走り回ります、見るとエアガンで友達と撃ち合って遊んでいるようです。

「――坊や、ちょっと其処の窓撃ってみてくれないか。」

「何で、おじさん。」

「中で寝ているお兄さんを、どうしても起こしたいんだ。」

「ガラスが割れるといけないから、窓に向けて撃っちゃだめだって、ママから言われているよ。」

「其処はおじちゃんの部屋の窓だから大丈夫だ、BB弾を後で買ってあげるから、窓ガラスに向けて撃ってくれないか。」

M16A1アサルトライフルはフルオートで長男のテラス窓を叩きます、厚さ6.8mmの網入りガラスは相当な音を立てて振動しますが、部屋の中に変化はありません。

夜釣り朝帰りの子供の親が、釣り道具を下げて階段を上がってきました。

パジャマ姿の亭主を見て、怪訝な顔で、「――どうしました？」

事情を話すと、「じゃ、これを使いなさい。昨夜釣ってたらグリップの辺りにひびが入ってね、もう使い物にならないから捨てようと思ってた・・・差し上げますよ。」

貰い受けた釣竿をいっぱい伸ばし、網戸の隙間から先端を部屋に入れますが、長男のベッドには僅かに届きません。

「そうだ！向かいのレトロ駄菓子屋は朝から開いてたな――。」

買って来た爆竹の塊を釣り糸に括り付け、導火線に火をつけて、さっきと同じように部屋に入れます、暫らくすると猛烈な破裂音が青い煙を伴って部屋から溢れ出てきました

。

あれだけ頑固に寝ていた長男も、流石に煙にむせながら窓から顔を出してきました。
その時です！

———火事です！火事です！避難してください！———

けたたましい警報が、マンション全館に反復再生され始めました。

「しまった！長男起こしたついでに、自火報発報させちゃった！」

自火報とは、マンションの自動火災報知設備のことです、直ぐに消防隊が集まってきます———。

オロオロする背後から、悲鳴が上がりました。

ビックリして振り向くと、電力会社の作業員が必死の形相で、大きなトランスを支えています。

高所作業車がゆらゆら揺れて、ついに作業員の両手を振り切った重い変圧器は、電柱の架材を次々引きちぎりながら、そのまま下水道工事の穴の中に落下しました。

———その瞬間！

大音響とともに、熱い空気の壁が襲ってきました。

盆明けの、弛緩しきった大気が、一気に灼熱した鋼の塊と化した一瞬でした。

耳の奥がキーンとして、音は一切聞こえません。

埃っぽい空気が、灰白く漂っています。

碧いパジャマも、塵を被ってグレーにしか見えません。

殺伐とした不安が心を蔽います。

「何か、爆発したな・・・。」

階段の手摺にもたれて体を支え、周囲を見渡すと、廻りのビルの窓ガラスが割れ落ちて殆ど無くなり、ブラインドやカーテンがそのまま外気に晒され、風に靡いています。

一面に薄く塵を被り、グレーの階調が辛うじて物の存在を表現しています。

空中を漂う無数の白いものは、多分近くのオフィスビルにあった書類でしょうか。

道路の方向に視線を移したとたん、惨状に度肝を抜かれて、再び意識を失いかけてました。

巨大なクレーターが、道路とそれに接する公園とにかけて出現し、その中央から10mを遥かに超える水柱と火柱が、お互いに巻き付きながら上空に立ち上がっています。陰陽相容れぬものが一体となった、不思議な光景でした。



周囲には、何人かの負傷者が血だらけで蠢いています。

虚ろな意識の中で、少しずつ記憶が戻ってきました。恐らく、下水道工事の穴の中に落ち込んだ電柱のトランスが、露出養生されていたガス管と水道本管を直撃したのでしょう。

聴力が回復してきました・・・。

状況が把握できるに連れて、家族のことが心配になってきました。

顔を出していたテラス窓には、既に長男の姿はありません。

新聞のメガホンで大声を出すと――。

「父さん、何してる？」

振り向くと、きょとんとした表情で長男が立っていました。

「締め出されたんだと思って、玄関開けに行ったんだ、そしたら大きな爆発音が出て・・・。」

夏の終焉の太陽が、やがて高度を得て、再び盛夏の勢いを取り戻そうとしています。

陽光の陰影にメリハリがついて、悲惨な情景のコントラストが増します。

マンションの火災発報で集まってきた消防隊も、この惨状に手の出しようがなく、遠巻きにオロオロ見ているだけで、一向に動きがありません。

我に返った周辺の住民の何人かが、負傷者を肩車にして助け始めました。

上空をへりの爆音が交錯し始めます。

割れた部屋の窓ガラスを片付けながら、長男が呟きました。

「玄関開けに行く前、電柱の作業員と一瞬目が合ったんだ。爆竹の音に驚いて両眼見開いてこっちを見ていた、その時電柱のトランスがガクッと動いてユラユラ揺れ始めた。――あの大爆発は、爆竹のせいかも知れないよ。」

それを訊いて、つくづく思いました。

今の世の中、自宅に帰るにも、それなりのルールと常識がある。

それを無視すると、とんでもない惨事になる、――と。

おわり。

当然ながら全てフィクションです、悪しからずご了解ください。

来たるべき巨大地震に際し、都市に於ける帰宅難民の問題が取り沙汰されています。

我国ほど、長い距離を通勤する社会も、他に無いのかもしれませんが。

何の為に通勤するのか？

私はそれが、鉄道やバスの巨大運輸産業の雇用を維持するためだけに、継続されているような気がしてならないのです。

今や我国は、若年労働力の危機的状況にあります。

通勤運輸のような非生産分野に、貴重な労働力、エネルギー、資本を割くべきではない。

在宅で仕事を始めて10年になりますが、雇用契約の折も、委託契約で働く現在も、特に支障を感じたことはありません。

貴方の仕事は本当に通勤が必要なのか？ 厳密に精査すべき時期だと思います。

帰宅困難

<http://p.booklog.jp/book/113602>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113602>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト